教育基本法改正論と宗教教育の行方

捨て難い日本の宗教的伝統

宗教教育は異文化理解にも

中嶋 嶺雄（中教審委員 国際社会学者）に聞く

宗教教育の重要性・必要性は宗教者もよく認識している。中央教育審議会（中教審）での教育基本法見直し論議では、宗教教育について結構議論されたという。委員の一人である中嶋嶺雄氏（国際社会学者、前東京外国語大学学長）に聞いた。

中教審での宗教教育議論について。

「文科省側は中教審に対して、少なくとも宗教心や神仏を畏敬したり、尊敬するような気持ちを教育の中に採り入れるべきだ、という意見を持っていました。今回の改訂そのものが、小渕首相時代以来の教育改革国民会議の流れを踏んでおりますので、その辺りから出てきたようです。

中教審委員にはクリスチャンやミッション系大学の学長もいらっしゃいます。答申では、そうした方たちの意見もかなり尊重されたように思います。その方たちは、日本人はあまり宗教心がないことに問題があるという見方を示し、宗教心をきちんと教えるべきであると言っていました。

これに対して私は、イスラム教やキリスト教は一神教であり、絶対神を崇める。ある意味では、他の宗教に対して排他的な面が強い。ところが日本の伝統は、宗教心がないように見えながら、儒教の影響もあると思いますが、他の宗教に対しても寛大なのです。神道と仏教が共存し、中国でも儒教と道教が共存している。韓国を含めた儒教文化圏は宗教といった場合に、それはむしろ道徳的規範とか規律。倫理といってもいいかも知れません。

だからマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』にあるような禁欲主義が近代の産業化をもたらしたこととは違う。日本の場合、儒教といっても『論語と算盤』といわれるように、決して禁欲的ではないのです。つまり儒教的合理主義が日本仏教に影響を与えていて、そういう宗教観を日本人は持っている。しかもその宗教観の根底は祖先崇拝です。私の菩提寺は曹洞宗ですが、お盆には必ず精霊棚を飾ってお墓から先祖をお迎えします。毎年これをすることで何となく安心感が得られる。それが日本宗教の伝統であって、これは決して否定されるものではない。

すなわち同じイスラムでも派が違うと異端者として対立が起きたりしているのに対して、仏教にも各派がありながらも共存ができているわけです。それを考えると日本の宗教的伝統というものは捨て難い。

ですから、あまり日本人は宗教心がないからけしからんということはどうか――そんな考えを私は申しました」

基本理念の「国を愛する心」（愛国心）への反発もあるようですが。

「委員は、政治や党派にとらわれているわけではありませんが、公明党は、国家が愛国心を押しつけようとしていると。しかしそうではありません。今日は民主主義の時代にあって多様な価値観が存在しているわけです。ファシズムの時代とはまったく違うのです。

自由と民主主義の基盤の上に立っている国を愛する心と、そういうものがない時代の愛国心を一緒くたにして論じるからおかしいのです」

宗教教育の具体的方法について。

「世界の宗教は文化であり文明です。現在はそういう人類が生んだ文化・文明を詳しく教えているとはいえません。何かを教えることは特定の宗教に加担することになるとか、またそんなことを言う人がいるものだから、教育現場ではほとんど宗教について触れていないと思うんです。

歴史としてお釈迦様がいつ生まれたとか、キリストはどうだったということは教えているでしょう。もう少し突っ込んで、例えば聖書を読んでみるとか、コーランを読んでみるとか。色々学ぶことは異文化に対する国際理解を深めることにもつながります」

仏教界に対して。

「長い伝統はあるのですが、逆にそこに安住していないか。もう少し社会性、国際性があってもいいし、そうした公共心を仏教界が考えていくことが、仏教が現代に意味を持って生きていくことではないかと、そんな風に思います」